

## その十三

(寺田寅彦抄)

## 初冬や竹伐る山の鉦の音

寅日子 是は先程小宮君の出された冬籠の句に趣の似た句に思ふ。例へば山裾の村を通りかかつた時に、近い山の方で竹を伐る音が聞えて来る、矢張「一鳥啼山更幽」云ふ趣がある。時候も初冬が一番適して居る様である。色彩の賑かな秋も過ぎ次第に景色が淋しくなつて天地が漸く眠りかけて行く、さういふ時候だに思ふ、この竹を伐る音が非常によく利いて来て、閑寂な山里の趣を見る様な氣がします。此句の次に「冬枯れて山の一角竹青し」其前には「山陰に熊笹淋し水の音」がある所を見るに、先生が此等の句を作つた時、少くも頭の中ではかう云ふ場所を歩いてゐたのだらうと想像される。

東洋城 此竹を伐るのは何か臨時に必要ながあつて一本二本を伐つてゐるのか、それとも竹を伐る時節で一山を引續いて伐つてゐるのか、鳥渡その區別がつかない。

寅日子 これは一人で少しの竹を伐つてゐる、多分冬構の用意に必要な竹を伐つて居るのだに考へたい。さうでないに此句にはふさはしくないと思ふ。

東洋城 竹伐る山が鳥渡大袈裟に聞える。一體竹はその伐る時節がきまつてゐる。竹伐る山といふて来るに、さうやらその伐り時の竹山をいふやうにされる。さうでなく臨時に只一二本を伐るのだに、普通の言ひ方では山の竹伐る鉦の音といふべきだからな。

蓬里雨 僕は此音は一本だけ伐つてゐる音なのだと思ふ。只寺田さん違ふ景色は、私は其音を山の裾に住んでる人が聞いてゐるのだに思ふのです。

寅日子 さうしても僕には大した差支はありません。

東洋城 併し臨時に一本や二本伐るのを竹伐る山といふのはちよ仰山に聞えさうだ。さうも一二本伐つてすぐ止んでしまふ音でなく、例へば朝から晩までいふ風に随分長い間續いて聞えてゐるもののやうに思はれる。其音を長く引續くな、聞くなれば、それが通りかかりの旅人であら

うき山下の家の住人であらうきぢらでもかまはない。

寅日子 初冬や、云ふに澤山の竹云ふよりも、一二本伐るに見た方がよかありませんか。此音は賑かなものぢやないと思ふ。

東洋城 初冬や、この調和はの方がいいかもしれないが、私のいふのは竹伐る山の、いふ言葉が特別に竹を伐りつつある山といふやうにきこえて、永いこき山に音がしたそれが竹を伐る音だといふこきになりたいたいのです。

蓬里雨 竹伐る山の、云ふに僕には、そのきんきん云ふ鋭い然し淋しい音が山に響いて聞える方が却つて強く来る。

東洋城 さういふ風にはこれない。こいふのは、始めから竹伐る山云つて、竹を伐つてゐるのを知つてゐるやうに敍してあるからだ。一體竹伐る、音は接続すべき言葉であるのに、其間に山の、こいふ言葉が這入つてゐる爲め二つが離れてしまつて、竹伐る山、山の音、別別の境になつてしまつてゐる。

寅日子 山で鉦の音がして居るから山の音である、それは竹を切つて居る音だこいふのでせう。別に顛倒といふ程の事でもない僕は思ひます。

蓬里雨 松山にはかう云ふ様な竹山はないかね、松根君。

東洋城 松山といふ所は市の真中に城山が一つ孤立してゐるばかりで、市の周圍にやや離れてゐる山は火山系の山で、多く地肌の露な松位生えた山で竹なんか無い。あれば城山位なもので、城山だけは樹木が鬱蒼としてゐるが、ちよいと思ひ出す程著しい竹藪はなかつた。あつたところできこかの谷間にすこし位あるかもしれないが、竹山といふ程ではない。

寅日子 先生は鉦や斧の音が好きだつたらしい。秋の江に打込む杭の音もいくらか似通つた所がある。

### 吹き上げて塔より上の落葉かな

寅日子 風が渦を巻いて吹いて来て、木の枝についてゐる葉を落して夫を大空へ捲き上げてゐるのを下から見てゐるのだと思ひます。實際は必しも塔の頂上よりも高くあがらなくても下から空に投射して見るから塔より上にあがつたやうに見えるのだらう。落葉の句こいふに、下に敷いて

るる靜的な句が多いのだが、是は活動的な落葉である。——下に落ちてゐるのが舞ひ上がらない事もないけれども枝から直接の方がよいと思ふ。

東洋城 いや實際かういふ事があります。下から見たからでなくても事實上塔より上にあがる事もありますよ。勿論それは一旦地に落ちたのではなく枝を離れて落ちるのでせうが。——塔さころではありません。私は先年冬上州のある山に登つた時、谷にちる木の葉が峯の上の大空まで風に捲き上げられる壯大な景色を見ました。これは大きな山の事だからでせうが、平地でも塔位越すところはたしかにあります。

寅日子 枝から落ちる途中にある木の葉も落葉といふでせうか。

東洋城 さういふのは本當は散る木の葉といふのです。落葉といへば「落ちた葉」こいふこゝで「落ちる葉」ではないのです。古人は嚴格にさう使つてゐるらしいのですが、近代は使ひ方によつては使はないこゝもありません。

寅日子 先生の此時分の句としては普通の句でせうね。

蓬里雨 わざの句です。

寅日子 明るい空に黒點の動く印象的な處がいいと思ひました。

蓬里雨 はつきりした繪は出來ます。——落葉こいふこゝ僕には地面に敷きつめてゐるもの丈しか考へられない。

寅日子 空を高く見上げるやうな心持のある所に面白味がある。

東洋城 塔より上のこゝ丈でかたづけたこゝに其技巧にある弱さもないではありませんが、さういふ景色も一境でせう。

蓬里雨 或意味で新しい所はある。

### うつむいて膝に抱きつく寒さかな

寅日子 是はさういふ風に膝に抱きつくのかその「姿勢」がはつきり分らない、兎に角寒いから自分の膝に抱きつくのだらう。併し寒さを表はしたこいふこゝよりは寧ろ貧しさ、淋しさの心持を表はした句として見るこゝ、此膝に抱きつくこいふこゝ言葉が可也はつきりした「心持」を與へる。

蓬里雨 是は身體が寒いこいふこゝよりは寧ろ「心」が寒いのでせう。

東洋城 僕はやつぱり身體が寒いのだと思ふ、此句を読んでいきなり人にはいるのは形だから。  
——當然に貧しいとか佻しいとかいふことは出来ないよ。只だそのごみ加減になつて我も我が  
膝を抱へ込む様な風體がいかにも寒さうなのである。

蓬里雨 田舎のステーションの待合室ではよくこれをやつてゐますね。

寅日子 成程これは適例だと思ひます。

東洋城 膝に抱きつくといふのは本當に抱きつくのではなくて、そのごみさまの極度な形の  
容ぢやないだらうか。

蓬里雨 本當に抱いてもいいさ。

東洋城 貧乏らしさは此場合のお助けはするが主題は人のからだ恰好に止まる方だよ。

寅日子 兎に角意氣銷沈してゐる所だ。

蓬里雨 僕もさうだと思ひます。

寅日子 先生はよく貧しい獨り者の心持を詠んでゐますね。

東洋城 是は自稱の句だらうか。

蓬里雨 無論さうだらう。併し假に他稱にしても、落ちて行く先は同じ所だね。

### 木枯や海に夕日を吹き落す

寅日子 海岸の多分山がかつた所の冬木立を思はせる。木の間から海がすいて見えて居る。日が  
もう大方沈みかかつて、空から海が寒さうに赤くなつて来る。そこへ木枯が頭の上の木をゆさぶ  
つて吹いて通る。さういふ光景の心持をかういふ風に云つたのではないかと思ふ。言ひ方が少し  
仰山なやうにも思はれるが、木枯の強い感じ、それから夕日の見る間に落ちて行く有様をかうい  
ふ風に云つても面白いかと思ひます。序ながら僕は先生が落日、殊に海に入る夕日といふものに  
對して特別の印象をどこからか得て居られたんぢやないかといふ事を、先生の書かれた色色のも  
のから見て推測する。だから此句も少しも誇張の心持はなく、本當の先生の心持を云つたものだ  
らうと思ふ。

蓬里雨 僕には夕日も見えはするが、夫よりも重に其夕日に照された雲が見える。腹綿をちぎつ  
たやうな慘憺とした雲が。

東洋城 寺田君が「手前の山」を「木の間から見える」を云はれたが、それは句の中にはない。夫等のものが事實見る人の側にあつても、人間の眼なり心なりは遠く海の果ての日の沈む方に行つてゐるから、唯だ広い海だけが見えればいいのです。

寅日子 僕は自分の経験からさういふ場所を想像しただけです。木を透して見た赤い海と空とが浮む。——此句はごこか蕪村張と云つた様な所がありませんか。

蓬里雨 さういふ所がありますね。

### 燭剪つて曉近し大晦日

寅日子 大晦日の晩に色々ごたごたしてゐたのが、やつと總ての事が片づいて、そこら中が綺麗になる、世の中が森として、只部屋に燭臺が一つ點つて居る、其心を剪るに燭が眞白に見える、もうそろそろ曉が近いと思ふ。如何にも冴え切つたやうな、ごこか神神しいやうな心持がする、さういふ感じを云つたものだらうと思ふ。さういふ所が特別にいいと云ふ事はむづかしいけれど

も、併し中中いい句だと思つてゐます。

蓬里雨 燭が白くなるさういふのはさういふのですか。明るくなる事ですか。

寅日子 心が長くなつて来るに燃焼が不完全になつて燭が赤くなり油煙を上げてゆらゆらする。それが心を切るに燃焼がよくなつて光が強く白くほくなる、或は寧ろ白く感ぜられる、そして動搖しないで澄み切つてステイに燃える。此心持が此句の心持だと思ひます。——理窟から云ふに、夜中の十二時に正月になるのだから、明方が大晦日では少し困るが、少くも東京では夜が明けなくては正月にならないからこれでよいのでせうね。

東洋城 曉近しと云ふまで夜から引續いて起きてゐる譯で、まだ大晦日の用が片付かないのだから、仕事に追はれて心が大分疲れて來てゐる所へ、もう明け方も近いさういふ事が大變引き榮えて明るく、氣が澄み心が引締つて來るのである。燭の方も何もなく薄暗くなつてゐたのを心を切つたので急にばつと明るくなる、と同時に、明け近いさういふ新年の喜びが働くのぢやないか。

蓬里雨 此句の切れ字は燭剪つてのてにある。てで心持が一寸休止する。従つて僕は此處で燭を剪る事が一年の仕事の總仕舞が一段落附いて、ほつとする心持を機微に繋がつてゐると思ふ。併し、寺田さんの「神神しい感じ」さういふのはさうですか。

寅日子 僕の「神神しい」云ふのは必ずしも「神」に關係した神神しさではありません。何の  
雜念もない澄み切つた清淨な心持をさしたのです。

大正十四年七月廿日印  
大正十四年七月廿五日第一刷發行

漱石俳句研究

定價貳圓貳拾錢

版權  
所有

代表者 寺田寅彦  
東京市本郷區駒込曙町十三番地

發行者 岩波茂雄  
東京市神田區南神保町十六番地

印刷者 小酒井吉藏  
東京市麹町區飯田町六丁目一番地

研 究 社 印 刷 所

發行所

東京市神田區  
南神保町十六番地

岩波書店

電話四谷五八七〇番  
振替東京二六二四〇番

51428

芭蕉俳句研究

幸田・沼波・太田・阿部  
安倍・小宮・和辻 著

定價貳圓五拾錢  
送料書留拾八錢

續芭蕉俳句研究

幸田・太田・沼波・阿部  
安倍・小宮・勝峰・和辻 著

定價貳圓八拾錢  
送料書留廿六錢

こゝろ (縮刷) 夏目漱石 著

定價壹圓五拾錢  
送料書留拾六錢

道草 (縮刷) 夏目漱石 著

定價壹圓五拾錢  
送料書留拾六錢

明暗 (縮刷) 夏目漱石 著

定價貳圓參拾錢  
送料書留拾八錢

漱石俳句集 夏目漱石 著

定價壹圓參拾錢  
送料書留拾六錢

硝子戸の中 夏目漱石 著

定價壹圓  
送料書留拾六錢

岩波書店

終

